

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ (15)

前回は、『弁正論』に立ち向かってみたのですが、いかがでしたでしょうか。外観を言えば「外の異」と「内の喩」の対論ということで「真偽を勘決」している、ということでした。当時の老子の思想にたちむかうべく法琳の気迫は、ひしひしと感じさせられます。

前回の課題は、**課題 58 中華思想をもって、仏教を優位とする「内の十喩」を親鸞はどう見たのである**

うか。ということでしたが、そのことを「仏教が他教をもって証明しようとしていることに対する問題性を、親鸞は感じておられたのではないか、」と押さえてきました。それは、もうすでに日本に定着してしまっている左右優劣思想なども含めて、他教として認識しておく必要があることを、私たちに指摘しているのではないかと思います。

私たちは、社会通念の中で、一般常識のように感じていても、実際は宗教的なものから出来上がってきたのが多いように思います。そういう文化や慣習が絶対正しいという観点に立った時、人間を呪縛してくるのではないかと思います。その辺に、親鸞は外教邪偽の異執という問題性を感じられていたのではないかと思います。そのことを申し上げてきたところです。

そして、次の『正法念経』では、大まかに「崇り思想」ということで申し上げましたが、これは、私たちは明確に外教と見抜くことができますが、その恐れを振り切ることは難しいのではないかと思います。私たちの日本社会は、正月には「ご利益」を願ったり「吉凶」を占ったりする習慣がずうっと続いています。

これは単なる慣習と私たちは思っていますが、それではなぜ辞めないのでしょうか。その根底には「崇り」を恐れる感情が潜んでいるからなのではないのでしょうか。「拝まないで、万が一悪いことが起こったらどうする」という潜在意識が働いてしまうのではないのでしょうか。その根底にはやはり「崇り思想」が潜んでいるからではないかと思います。

とりあえず、ここまでは、中国の外教・邪偽の異執が述べられている、というとらえ方をしてみました。今回は『法事讃』の文章から入っていきたいと思います。

ここで述べられていることは、「娑婆の十悪・五逆（の人達）」の様子・姿を述べている文であります。どういう様子かという、「多く疑謗し、邪を信じ、鬼に仕え、神魔をあかしめる（神魔に生贄を捧げる）。」また「妄りに想いて、恩を求めて福あらんと思っても、災障禍横さまに転いよいよ多し。」と述べられています。そしてその結果、連年に病気になって、床に臥したり、耳が聞こえなくなったり、目が見えなくなったり、足や腕をおったりしてしてしまいます。そういう神々によく仕えていながら、そういう報いを得る者のために、上方世界の諸仏たちは「どうして、そんなものを捨てて、弥陀を念じないのか。」と述べられている事であり、と書かれているわけですね。

これも、言い過ぎのような気がしますが、それは「上方の諸仏が振り返って舌相を述べている」という内容の事ですね。これは『阿弥陀経』の「上方世界・・・出広長舌相 偏覆三千大千世界 説誠実言」というところから述べられているのでしようけれども、その内容となると出典は全くわかりません。

こういう内容があるとすれば、『阿弥陀経』「六方段」の意味を知りたくなってまいりますね。東西南北は

世界観を示していると了解できますが、上下は何を意味しているのか、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。そう致しますと『天台四教儀』に「下品」と出ています。これは『観経』の「九品」の内の「下品」でしょう。これは上・中・下で示されていますが、先に述べた‘上下’と類似していると考えれば、‘上方’は「上品・中品（大・小乗仏教）」と‘下方’は「下品（外道）」に充当させることができると考えられます。『観経』で見られるように、「下品」は三つの‘生’共に悪業を起こす人たちを示しております。

しかし、その先まで読んでいきますと、いわゆる外道の人たちが取り付いている‘神’や‘魔’、‘鬼’などについての論議が示されてきているように思います。

ですので、今回はそれを課題にして考えてみたいと思いますので、皆様からのご意見をお持ちしています。

課題 59 上下についてのもう一つの視点

さて、『楽邦文類』からずうっと流して読んでいきたいと思います。

まずここで「祭祀の法は」というところからはじまっていきます。これは外道の祭祀の事ですね。ここに「真を論ずるは俗を誘うるの権方なり」とありますが、これは「真実を述べているフリをしているのは、世間の人を誘い込むためのかりそめの方法である」という意味ですね。

それに続いて『天台四教儀』を引用して「餓鬼道」の説明をいたします。ここに興味深い内容が書かれています。それは「餓鬼道は様々あって、福德ある者は山林塚廟神となり、福德ない者は不浄なところに住み、食べ物も得られず、鞭で打たれたりもする。」という境遇の優劣が語られています。ここに上下の境遇が示されているわけです。言うなれば、社会の身分の差を言い当てていると思います。

それから、次の『四教儀集解』にも出てくる「詔誑（ハツライ・クワカス）」は餓鬼の心（根性）を言い当てているのでしょ

うでしょう。そしてその「詔誑」をもって、餓鬼道を鬼神と言い換えられ、それが‘悪道の所収’として「魔」と名付けられていきます。その根拠が「神は曰く鬼神なり。すべて四趣・天・修（羅）・（餓）鬼・（地）獄に収む」ということですね。四趣とは本来「地獄・餓鬼・畜生・修羅」ですが、ここでは畜生をぬいて天をいれています。この‘天’をいれることによって鬼神が‘魔’と同じになってきます。（参考までに。他化天の大魔王とある。）魔は六欲天の他化自在天に居るとされているので、魔と鬼神をもって上記の四趣にいるということになるわけです。

そして「魔はすなわち悪道の所収なり」と結ばれ、今度は、話は「魔」に移っていきます。まずは『止観』から引用され、それから『往生要集』に引用されている『止観』の文章を挙げております。ここまでの「鬼神」についての文章の流れです。

この文章の流れは、一口で言えば、「餓鬼道は鬼神であり、鬼神は魔である」ということでしょう。

さて、親鸞はこの文章で何を言いたかったのか、「上下」ということを念頭に置きながら、すこし推測してみたいと思います。

まず『摩訶止観』は天台宗の根本聖典であるという事。そして「魔の発相を明かす」という事。‘発相’というのは‘発’は「アバク」「相」は「スガタ」ですから「正体を暴く」という意味になりますかねえ。ここで注目すべきことは「管属」という言葉です。「管」とは‘管理’の意味で「属」は‘ヤカラ’という意味から「一門・身内・同輩・官僚等」を、それから「部下・配下」をも意味する文字だそうです。そうしますと、「管属」とは支配階級の人々を指していると思て間違いはないと思います。（因みにそれを『後序』の文でいえば、「主上臣下」に充当するのではないかと。）

そしてその「魔」を細かく見てみると三種ある、というわけです。なぜこんなに丁寧に親鸞は見ているのか、疑問になるのですが、当時の具体的な事象を例に挙げて考えようとされているならば、親鸞のその意図が見えてくるような気がします。

それで、この三鬼がなぜ引用されているのか、それを調べようと思ひ、いろいろ仏教関係の辞書等で見た

のですけれど、中々見つからず、Wikipedia で調べたら、下記のような文章が見つかりました。

参考：弘法大師空海が大同元年(806年)に弥山を開基した時、三鬼大権現を勧請して祀ったのが、始まりとされる。広島県廿日市市宮島の弥山の三鬼堂と、同島の大聖院内魔尼殿(まにでん)などに祀られる。三鬼大権現は大小の天狗を眷属に従え、強大な神通力で衆生を救うとされ、地元では三鬼さんとして親しまれている。

- 追帳鬼神(ついちょうきしん)：「福德」の徳を司る鬼神で、大日如来を本地仏とする。
- 時眉鬼神(じびきしん)：「知恵」の徳を司る鬼神で、虚空蔵菩薩を本地仏とする(弥山本堂にはその虚空蔵菩薩が本尊として祀られている)。
- 魔羅鬼神(まらきしん)：「降伏」の徳を司る鬼神で、不動明王を本地仏とする。

これは広島県の安芸の宮島に祭られているとの事ですが、ご存じのように平安時代になりますと、比叡山の天台宗、高野山の真言宗の山岳仏教が広まっています。その平安仏教の本地仏がそれぞれに三鬼に充当していったのでしょうか、それともその三鬼からそれぞれの本地仏になっていったのか、その点はわかりませんが、想像するに、親鸞はこの三鬼をもって「諸寺の釈門・洛都の儒林」という人々を暗示しているのではないかと思うのです。

そして、源信をもってきて『止観』から引用して「菩提心を奪い、命を奪う」と結ばれているわけです。さて、もう一つの‘上下’ですが、‘上品’と‘下品’ではなく、‘下品’という「外道」の中に上下の身分階級がある、ということでしょう。そういう中で、人々の菩提心(仏道)を奪い、人々の命(希望)を奪っていく権力者を‘魔・鬼神’と押さえて、(『論語』の)「人間がどうして鬼神に仕えなければならないのか。(仕えるはずがないだろう)」断言しているのです。そしてその決意は「禿の字をもって姓とす」という一文に込められていると思うのです。それを言うならば「そういう社会の身分制度から抜け出す」という気持ちなのではないでしょうか。すなわち要約すれば、社会の身分制度による上下関係は、人間の身分ではなく、魔や鬼神(形は人に似て、あるいは獣のような、心は正直でなく、煩惱によって菩提を奪い、人間としての命の源を奪う)たちの支配構造である、と述べられているとおもうのです。

(以前、この『後序』を「後序」としてではなく、インドの「外教・邪偽」、中国の「外教・邪偽」、そしてこの「後序」は日本の「外教・邪偽」を示している、と申し上げたことがありますが、今その根拠を述べているところでもあります。)

それで、そのことに関して、もう一つ取り上げておかなければならない点があります。それは「諱」であります。この言葉も歴史的に調べる必要がありますが、概略を調べておきましょう。これも Wikipedia ですが

参考：諱という漢字は、日本語において「いむ」と訓ぜられるように、本来は口に出すことがはばかれることを意味する動詞である。

この漢字は、古代に貴人や死者を本名で呼ぶことを避ける習慣があったことから、転じて人の実名・本名のことを指すようになった。本来、名前の表記は生前であれば「名」、死後は「諱」と呼んで区別するが、のちになって生前に遡り諱と表現するなど、混同が見られるようになった。諱と対照して普段人を呼ぶときに使う名称を「字」(あざな)といい、時代が下ると多くの人々が諱と字を持つようになった。

諱で呼びかけることは親や主君などのみに許され、それ以外の人間が行った場合は極めて無礼であると考えられた(詳細は後述の「実名敬避俗」及び避諱を参照)。

親鸞存命の平安時代はどうだったかわかりませんが、「諱」は死者の名とされています。前述の『四教儀集解』には「古は人死と名づく、婦人とす」と述べられています。ここに述べられている天皇たちを「忌み名」で読んでいたということは、人間ではなく鬼神としてみている、という意味を持たせているように感じています。

したがって、最初の『法事讃』に述べられているような、鬼神に仕えるような生き方を捨てて「弥陀を念じて」生きていく道を選んだ、ということをごここに表明されているのではないのでしょうか。

その親鸞の仏道の歩みが「しかるに愚禿釋の鸞、」から「よって悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す」まで述べられているのです。

その後、「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、」から最後までは、科文でいえば（p 1012）「本典撰述の本意」ということになりますね。

私たちは「竊かに以みれば」から『後序』と習ってきましたが、それを「序」としてみるならば、その「序」によって導かれる本文は何なのか、中々読み込めません。それよりも「慶ばしいかな」から「流通分」として受け止めた方がわかりやすいと思います。そしてその‘流通’の内容として、『安樂集』と『華嚴經』を引用してそれぞれ往相回向・還相回向の姿を表現していると思います。言い換えるならば、「ここに浄土真宗という真実の仏教が流通していくのである」ということで締めくくっている、と私は思います。（終）